

# 現代中国ムスリムにとっての「民族」と「宗教」

CHENG JIA

中国には、イスラム教を信仰する少数民族が 10 ある。この中では回族の人口が最も多く、また、回族は他のムスリム少数民族とは異なり、中国各地に分散している。「回族」は、1949 年以降、中国共産党政府が少数民族として認定した漢語を母語とするムスリム少数民族を指す。

寧夏回族自治区は 1958 年に設立され、総人口は 630.1 万人（2010 年）で、回族の人口は 217.4 万人(自治区総人口の 32.04%)である。寧夏の回族は、漢族に囲まれながら日常生活を営んでいる。1980 年代以降、中国の「改革開放政策」が本格化した結果、大都市では再開発が推し進められ、回族と漢族の混住化が急速な勢いで進んでいる。また、職場や学校では回族と漢族が恋愛、結婚する事例が増加している。

しかし、回族が伝統的な婚姻のあり方として望ましいと考えるのは回族同士の民族内婚である。回族が漢族と結婚してしまうと、それぞれの食習慣と死生観などの違いから結婚後の家庭生活に文化摩擦が発生しやすいと考えられているからである。漢族と回族が結婚する場合、漢族はイスラムに改宗せねばならない。たとえ漢族がイスラム教に改宗したとしても、その後の夫方親族と妻方親族の付き合いが面倒だと考えられることが多く、漢族は結婚相手としては敬遠される傾向にある。漢族が豚肉を常食することも回族が漢族との結婚を忌避する理由の一つである。

一般的な傾向としては、回族の男性が漢族の女性を娶る事例が多く、漢族の男性が回族の女性を娶る事例が少ない。回族の女性が漢族の男性と結婚した場合、嫁ぎ先、すなわち漢族側親族の成員となり、その後の生活を漢族社会の中で営むことになり、漢族にそのうち同化してしまうのではないかという危機感が回族の人々の間では根強いからである。ただし、漢族側親族が回族側親族の生活習慣に理解を示す事例もある。

近年、大都市を中心として回族と漢族との民族間通婚が増加しつつあり、回族社会内部で深刻な問題となっている。本論文は、中国の寧夏回族自治区において、回族と漢族の組み合わせで結婚した夫婦にインタビューし、結婚後の夫婦が「民族」や「宗教」をどのように理解しているのかを明らかにした。

第1章では、研究背景と目的、先行研究、研究方法について述べた上で、中国最大の回族集合区である寧夏回族自治区の人口、地理環境、民族概況などを紹介した。

第2章では、回族の婚姻形態と変容をまとめた。まず回族の人間観と結婚間を紹介し、次に婚礼のかたちと、近年におけるその変化を説明した。

第3章では、回族と漢族の婚礼を比較し、近年の漢族の結婚のあり方の変化について、インタビュー結果を用いて説明した。

第4章では、筆者が寧夏回族自治区銀川市の3つの結婚形態の夫婦にインタビュー調査を実施した内容をまとめた。具体的には、回族の女性と漢族の男性、回族の男性と漢族の女性、ともに回族の男性と女性という結婚形態の夫婦である。いずれの夫婦も、中国の1980年代の「改革開放」政策後に生まれた人たちで、年齢層は20代から40代までである。

伝統的な慣行として回族は回族と結婚する傾向があり、かりに漢族と結婚する場合、漢族をイスラム教に改宗させ、シャリーアにもとづく結婚として認められるようにする。回族の女性と漢族の男性の夫婦の場合も、漢族の男性はイスラムに改宗してから結婚した。インタビューからは、葬送儀礼や習慣の違いが、食べ物についてのイスラム教の規定よりも大きな問題として認識されていることが分かる。ただし、実際にはある程度柔軟に対応しようとしているようである。彼ら・彼女らにとって、民族と宗教は分けるべきものになっている。イスラム教の信仰と風俗慣習などは家族から影響されても、自分自身の信仰心は薄く、徐々に漢化されていると言える。回族の男性と漢族の女性の夫婦も、結婚生活において相手の生活習慣などを尊重することは非常に重要であるとしていた。回族どうしの組み合わせの夫婦へのインタビューからも、宗教や習慣の違いについては親の世代よりも寛容になっていることが分かった。インタビュー対象の夫婦はその理由として、回族と漢族が混ざり合って暮らしていることの影響や、教育水準の上昇などを挙げていた。

第5章では、インタビューに基づく考察をまとめた。インタビューからは、食生活、葬儀、結婚対象の選択などにおいて、民族間の文化の差異及び回族の民族的なアイデンティティの意識は次第に弱まり、回族と漢族の組み合わせの婚姻関係における摩擦や矛盾も少なくなっていることが分かった。このような現在の若者の意識の変化からは、「回族であること」と、「ムスリムであること」が別のものでされていることが分かる。インタビューにおいても、民族と宗教は別であり、民族と信仰を混同すべきではないということが語られていた。